



Title	パラグアイ戦争（三国同盟戦争）（1864-70）に起因する人口減少に関する覚書
Author(s)	東, 明彦
Citation	ブラジル研究. 2026, 20, p. 17-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106119
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

パラグアイ戦争（三国同盟戦争）（1864-70）

に起因する人口減少に関する覚書

東 明彦¹

はじめに

パラグアイ戦争は、1864年11月12日、ブラジルのマトグロソ県の県都コルンバに向けてパラグアイ川を航行中であったブラジルの蒸気船「マルケス・デ・オリンダ号」をパラグアイが拿捕し、翌月にマトグロソ県に軍隊を派遣したことで始まり、1870年3月1日、パラグアイ北東部のセロコラにおいてパラグアイの指導者フランシスコ・ソラノ・ロペス（1827-1870、大統領在任1862-1870）が戦死したことで終わった。つまり、戦争は、5年間以上続いた。

戦争は、ウルグアイへのブラジルの介入とそれに対するパラグアイの反発を直接の契機として始まったが、その背景には、ラプラタ地域をめぐる各国の思惑、特にブラジルとパラグアイとの間の領土問題とパラグアイ川の自由航行に関する問題があった。²

パラグアイ戦争では、パラグアイと三国同盟（ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイ）³が戦ったが、戦争において三国同盟軍の主力となったのは、ブラジル軍であった。⁴

パラグアイ戦争の推移は、おおむね次の三つの段階に区分される。重要な
のは、5年以上継続した戦争の大部分がパラグアイ領内で戦われたことである。

(1) 第一段階 (1864 年 11 月-1866 年 4 月)

パラグアイ軍のブラジル南部、アルゼンチンへの侵攻の試み

(2) 第二段階 (1866 年 4 月-1868 年 12 月)

同盟国軍のパラグアイ侵攻とウマイタ要塞をめぐる戦い

(3) 第三段階 (1869 年 1 月-1870 年 3 月)

パラグアイの首都アスンシオンの占領とロペス掃討戦

この戦争は、一般に、多くの犠牲者が出たことで知られ、英国人史家レズリー・ベセルによれば、ナポレオン戦争終結 (1815 年) から第一次世界大戦勃発 (1915 年) の 100 年間で、クリミア戦争 (1853-56) と並び、「最も血生臭い国家間の戦争」(the bloodiest inter-state conflict) であった。⁵日本においても、パラグアイ戦争の惨状は早くから知られており、邦文でのラテンアメリカ史研究の先駆的な著作『ラテンアメリカ史概説』(1949)において、田中耕太郎は、「パラグアイ戦争は世界歴史上比類のない悲惨な殲滅戦であった」⁶と記している。

パラグアイ戦争の特徴としては、戦争が、軍事面だけでなく、政治・財政面を含む一国の国力をつぎ込む、いわゆる「総力戦」の様相を呈したことが挙げられる。⁷そのため、敗戦国となったパラグアイのみならず、参戦国、とりわけ、三国同盟軍の主力となったブラジルの戦後の歴史にも大きな影響を及ぼした。⁸

1. パラグアイ戦争における人的被害と人口減少

5年以上にわたる戦争での参戦国各国の兵士の戦死者は、膨大な数に上った。この「戦死者数」には、戦場に赴いたが、一発の銃弾を発射することもなく病気や体力の消耗により死亡した兵士も含まれる。パラグアイ戦争のように戦場が不健康地である場合には、戦闘での死者や戦場での負傷を原因として死亡した者の数よりも、病気等での死者数のほうが多かった。⁹

イギリス人でパラグアイ軍の医師として活動したウィリアム・スチュワート・マクファーレン（1830-1916、別名ギリエルモ・スチュワート）によると、戦死者には、「戦闘よりも、飢え、疫病（コレラ、赤痢、天然痘等）、処刑による死者数のほうが多かった」。19 世紀末までの戦争では、戦死者の 20%のみが戦闘で亡くなり、大部分の者は、それ以外、つまり病気、不十分な食事、事故などにより死亡したと言われるが、パラグアイ戦争もその例外ではなかった。¹⁰

戦争における犠牲者は、軍人の戦死者と飢えや疾病などを原因とする民間人の死者に区分されるが、パラグアイ戦争では、戦争がおもにパラグアイ領内で戦われたため、軍人のみならず、一般の民間人の戦争関連死も多数に上った。

パラグアイ戦争で戦死者がとりわけ多かったのには、いくつかの要因があった。トーマス・L・ウィガムは、パラグアイ軍の士気が戦争を通して高く、降伏を忌避したことを特記している。ウィガムは、サミュエル・エリオット・モリソン提督（1887-1976）の言葉（1958 年）[第二次世界大戦時、ヨーロッパ戦線では、あらゆる戦闘において軍の 3 分の 1 を撃破すれば、ドイツ軍は降伏したが、日本軍は、けっして降伏せず、アメリカ軍は、ほとんどの場合、兵士一人ひとりを殺害しなければならなかった]を引き合いに出し、「パラグアイ軍は、1864 年-1870 年の戦争では、日本人のように行動した。三国同盟国軍は、この傾向に適切に対処する術を知らなかった」と述べている。¹¹

また、死者数の増加には、当時のパラグアイでの衛生上の問題も大きく関わっていた。パラグアイでは、数十年ごとに疫病が発生したが、生き残った人々は免疫を得た。疫病発生後、年月が経過すると、免疫をもつ住民は減少したが、村落は孤立していたので、旅行者の往来に要する期間が一種の「検疫」期間の役割を果たしていた。ところが、徴兵により、多くの人々が集められると、悲惨な結果が生じた。パラグアイ戦争に従軍したイギリス人ジョージ・トンプソン（1839-1876）は、1864 年 3 月から 8 月までの 6 ヶ月間に徴兵され、訓練地に集められた約 7 万人のうち、約 6,000 人が訓練期間に死亡し

たと記している。¹²

パラグアイ戦争に起因する人口損失数に関しては、文献により、その見解に大きな差異がある。その中には、戦争による人口減少が戦前の総人口の 70%、80%を超えるとの見解も珍しいわけではない。

ウィガムが述べているように、その好例は、ブラジル人ジャーナリスト、ジュリオ・ジョゼ・シアヴェナトが著した『パラグアイ戦争：アメリカ大陸におけるジェノサイド』である。¹³

1970 年代末の軍政期、ブラジルでは、パラグアイ戦争に対する関心が高まったが、それはまさにこの著作の影響であった。大ベストセラーとなり、多くの版を重ねた同書¹⁴の第 14 章「ジェノサイドがなされた。パラグアイ人の 75.75%が死亡した」において、著者は、戦争で、戦前の人口（著者は、80 万人と推計）のうち、60 万 6,000 人、つまり人口の 75.75%が死亡し、戦後の人口 19 万 4,000 人のうち、男性は、1 万 4,000 人に過ぎなかったとし、戦前の男性の人口 40 万人のうち、戦争で 38 万 6,000 人、つまり 96.50%が死亡したと断じた。¹⁵

2. パラグアイ戦争における人口減少をめぐる論争

本稿では、以上の点を踏まえながら、1980 年代以降、ラテンアメリカ史学の専門誌で交わされたパラグアイ戦争による人口減少についての論争を紹介することにする。

- (1) ベラ・ブリン・リーバーによる問題提起
- (2) トーマス・L・ウィガム、バーバラ・ポットハストらによるリーバー批判と新史料の提示
- (3) リーバーの反論、およびヤン・M.G・クラインペニンフによる修正案
- (4) リーバー、クラインペニンフのコメントに対するウィガムらの見解

(1) リーバーによる問題提起

人口学者のリーバーは、「パラグアイの人口統計学：大戦争（1864-70）」¹⁶の

再解釈」において、パラグアイ戦争に関する歴史研究について、その経済・人口統計の面での研究の遅れを指摘し、従来、パラグアイ戦争において戦闘・疾病・飢えにより人口の2分の1以上が失われたという結論が安易に受け入れられてきたと批判した。

そして、洗練された人口統計学の手法を用い、19世紀ラテンアメリカ諸国の歴史的な人口成長率との比較やパラグアイの人口統計、世帯人数の見直しを通して、戦争に起因する人口減少は、戦前人口の8.7%から18.5%に過ぎなかったと結論づけた。¹⁷

パラグアイ戦争に起因する人口減少数を算出するために必要なのは、戦争開始時(1864年)のパラグアイの推計総人口と戦争終結時(1870年)の推計総人口である。問題は、パラグアイでは18、19世紀に行われたセンサス(人口調査)は散発的で、しかも多くの不備を抱えている点にある。そのため、研究者は、推計にあたり、まず比較的信頼のおけるセンサスを選択し、それを他の史料も利用しながら補正し、総人口を推計する。次いで、例えば、開戦時の総人口を推計するには、当時の人口増加率を推計し、その増加率を用いて、センサスの年から1864年までの人口増加数を推計するという手順を踏むことになる。

その際、研究者により差異が出やすいのは、人口増加率の推計である。

リーバーは、1792年、1846年、1886年、1899年の4つのセンサスが比較的正確であると考えた。¹⁸

そして、19世紀の他のラテンアメリカ諸国の人口成長率との比較も行い、当時のパラグアイの人口増加率は、1846年から1864年まで、1.0%-1.5%、1870年から1889年まで、1.8%-2.2%と推計した。¹⁹

こうして、リーバーは、1846年のパラグアイ人口を238,862人から248,394人とした上で、1846年から1864年までの増加率が1.0%から1.5%なら、1864年のパラグアイ人口(つまり開戦時の人口)は、285,715人から318,114人であると推計した。²⁰

また、19世紀の末期の人口増加率が1.8%から2.2%なら、1886年のセンサ

ス、および1889年センサスでの人口から逆算して、1870年の人口（つまり終戦時の人口）は、261,069人から292,514人であると考えた。²¹

以上の数字から、リーバーは、パラグアイが戦争を通じて8.0%-17.9%の人口を失ったことになるとし、人口減少の実態としては、戦争での死亡による人口喪失を7.5%、そのほかに戦後の国外への移民と領土の譲渡（パラグアイは、敗戦に伴い国土の4分の1を失った）による人口喪失を1.2%、つまり合計で8.7%の人口を失った可能性が最も高いとした。（この数値は、パラグアイが戦争でその人口の少なくとも半分以上を失ったと考えてきたパラグアイ史研究者には衝撃的な低さであった。）²²

次いで、リーバーは、人口減少の原因として以下の三つを挙げた。²³

- (a) 戦闘および疾病による兵士の死亡
 - (b) 主に疾病による民間人の死亡
 - (c) 移住と領土喪失に伴う人口損失
- そしてそれを以下のように提示した。

[表] パラグアイ戦争（1864-1870）におけるパラグアイの人口減少
（人口減少が最小であるケースと最大であるケース）

最小のケース（原因別）（8.7%） [原因は、上述の（a）（b）（c）に対応]

原因	人口減少の総人口に対する割合
(a)	5.0%
(b)	2.5%（内訳：コレラ 1.0%、黄熱病 0.5%、その他 1.0%）
(c)	1.2%（内訳：移住 1.0%、領土喪失に伴う人口移動 0.2%）

最大のケース（原因別）（18.5%）

(a)	8.0%
(b)	7.0%（コレラ 3.0%、黄熱病 1.0%、その他 3.0%）
(c)	3.5%（移住 3.0%、領土喪失に伴う人口移動 0.5%）

つまり、「戦闘および疾病による兵士の死亡」により、戦前の総人口の5.0%

から 8.0%が失われ、「主に疾病による民間人の死亡」により、戦前の総人口の 2.5%から 7.0%が失われ、「移住と領土喪失に伴う人口損失」により、戦前の総人口の 1.2%から 3.5%が失われたというのである。

リーバーがその論考において人口推計の基礎とした 1792 年、1846 年、1886 年、1899 年のセンサスが人口減少をめぐる議論の出発点になることについては、研究者に一定の共通認識があるし、人口減少の三つの要因も、多くの研究者が同意できるものである。

ただ、リーバーの研究は精緻な分析の形は取っているが、論拠の弱い部分があった。それは、人口増加率の数値であった。簡単に言えば、算出方法からして、開戦時の人口は、人口増加率を低く見れば、少なくなる。その結果、開戦時の人口から終戦時の人口を引いた差、つまり人口減少数は少なくなる。その意味で、人口増加率の問題は議論の根幹にかかわる問題であったのだが、その点にかかわるリーバーの推論は、必ずしも他の研究者を納得させるものではなかった。結局、この点が、ウィガムやポットハストから最も強い批判を受けることになる。

(2) ウィガム、ポットハストらによるリーバー批判と新史料の提示

ウィガムらは、1990 年の *The Hispanic American Historical Review* (HAHR) 誌 (Vol. 70, No. 40) でのコメントでリーバーの論文に反論するとともに、1999 年には、新資料（ウィガムらは、「パラグアイのロゼッタストーン」と呼んだ）の発見を告げる論文を発表し、改めてリーバーの主張に反論した。

(a) 1990 年の HAHR 誌に掲載された「いくつかの強い懸念：ヴェラ・ブリ
ン・リーバーの『パラグアイの人口統計学：大戦争（1864-70）の再解釈』に
対する批判」と題されたコメントの中で、ウィガムらは、リーバーの主張は、
従来の見方に対する過度の修正であると批判した。最も問題視したのは、パ
ラグアイ史研究者の多くが、重要な点で、パラグアイには他国とは違う特異
な点があると考えているにもかかわらず、リーバーが、他のラテンアメリカ

諸国の事例との比較を重視しすぎた点であった。ウィガムらは、「他国の人口増加率によりパラグアイの増加率を正しく定めることができるか否かは大きいに問題がある」²⁴とした。リーバーは、人口推計の傍証となる世帯人数の推計に際し、パラグアイもチリも農業国で、利用可能な十分な土地があり、奴隷制に依存していない等々の理由で両者は似ており、チリの数字はパラグアイに適用できるとしたが、ウィガムらは、両国は、気候も、民族・社会経済構造も、政治文化も異なっていると反論した。²⁵

上述のように、人口増加率を低く見れば、立論の仕方からして、開戦時の人口は低くなり、開戦時と終戦時の人口の差異は小さくなる。つまり、人口減少は、いままでの研究に比べて小さくなる。そのため、人口増加率の設定に説得力がなければ、議論そのものが成り立たなくなる。ウィガムらは、その点を踏まえて、コメントの最後を「三国同盟戦争の戦中・戦後のパラグアイ人口統計の問題は、いまだ未解決である」という言葉で締めくくった。²⁶

(b) 1999 年になり、ウィガムらは、「パラグアイのロゼッタストーン：パラグアイ戦争 1864-1870 の人口統計に関する新たな洞察」という論文を発表し、その冒頭、「三国同盟戦争の期間中のパラグアイの人口喪失に関する議論は、人口統計学者、軍事史家、国民性の研究者の関心を引き続けている。」「50%以上の喪失を主張する従来の見方が正しければ、パラグアイの経験は、明らかに、近代の戦争の歴史において、[例外的な]注目に値する事例だからである」と述べた。²⁷

そして、新発見の史料により、「戦争でパラグアイ人の半数以上が死亡した」という伝統的な推計が基本的に正しいということがいまや明らかになったと考えられる」と宣言した。²⁸

その上で、まず開戦時の人口の推計を行うため、18 世紀のセンサスの数値やそこから導き出される人口増加率を用いて、歴史家一般が比較的信頼できるとする 1846 年のセンサスをできる限り補正した。²⁹

このような作業を経て、1846 年のパラグアイの人口を 284,302 人から

295,999 人とした。(ちなみに、リーバーの推計では、238,862 人から 248,394 人)そして、18 世紀、19 世紀のセンサス結果の変動をもとに、人口増加率として 1.75%-2.5%を採用した。(ちなみに、リーバーの推計では、1.0%-1.5%) 以上にもとづき、開戦時、1864 年のパラグアイの人口は、388,511 人から 456,979 人と算出し、最も可能性が高いのは、420,000 人から 450,000 人であるとした。(ちなみに、リーバーの推計では、285,715 人から 318,114 人)

このように、1864 年の人口推計を提示した上で、新史料「1870 年のセンサス」の発見を告げ、その内容を提示した。史料は、パラグアイ国防省の文書館に保管されており、ウィガムらはほぼ完全なものと考えていた。

新史料は、管轄区域 (*partido*) ごとに、性別および年齢別に住民数を報告したもので、年齢は、老人 (*ancianos*) [50 歳を超える者]、青年 (*jóvenes*) [12 歳から 50 歳]、子供 (*niños*) [12 歳未満] に分類されていた。(ただし、この区分は必ずしも厳密なものではなかった) 12 歳から 50 歳の年齢層では、男女比は、ほぼ 1 対 4 の比率であった。³⁰

史料の数値にもとづくと、1870 年の人口は、総計 116,351 人となるが、ウィガムらは、報告のなかった管轄区域の住民数を補正し、人口を 141,351 人から 166,351 人とした。³¹

そして、1864 年の推計人口 (42 万人-45 万人) と 1870 年センサスにもとづく推計人口をもとに計算すると、戦争に起因する人口減少は、60%から 69% となるとした。(ちなみに、リーバーは、8.7%-18.5%)

(3) リーバーの反論、およびクライペンシンによる修正案

新史料にもとづくウィガムの主張に対して、2002 年、リーバーは *Latin American Research Review* (LARR) 誌 (Vol. 37, No. 3) にコメントを寄せ、新発見の史料がセンサスとして完全なものとは考えられないとした。³²つまり、1870 年センサスの数字は、1886 年の数字と整合性がない上、パラグアイにある 95 管轄区域のうち、30 管轄地区の数字に限られ、センサスに大きな不備があるとした。

また、オランダのヤン M.G. クインペニンフは、18、19 世紀のパラグアイのセンサスは、子供の数が省かれ、遠隔地に居住する人々が省かれるなど、実際より少ない数字である傾向があると指摘し、その意味で、さらなる補正が必要であると主張した。³³その上で、戦後の人口に関して、1899 年のセンサスの数値と 1870 年と 1899 年の間の期間の推計人口増加率 1.8%-2.2%を用いて、1873 年 1 月 1 日現在の人口を 221,000 人から 230,000 人とした。³⁴

そして、1864 年の人口については、ウィガムらの推計人口 (388,511 人 -456,979 人) を採用し、戦争に起因する人口減少を 43.1%-51.6%とした。³⁵

(4) リーバー、クラインペニンフのコメントに対するウィガムらの見解

ウィガムらは、新史料に対する反論のうち、主にリーバーの反論にコメントし、新史料はパラグアイの人口の大部分が居住する管轄区域のデータを含んでおり、補正を行うことで 1870 年のセンサスの数字は有効であると述べ、新史料の価値を改めて強調した。³⁶

おわりに

ウィガムは、2021 年に刊行された『大戦争：パラグアイの叙事詩的な歴史事件についての外国人歴史家による座談と考察...』³⁷において、開戦時の人口を約 45 万人、終戦時の人口を約 22 万 1,000 人（うち成人男性、約 2 万 8,000 人）とした。その場合に、人口減少率は、50.9%となる。³⁸

また、同書の脚注 107 において、アスンシオンのラ・レフォルマ紙 (La Reforma) (1876 年 8 月 6 日付) の記事において、[現時点ではその存在は知られていない] 1872 年 4 月のセンサスへの言及があり、それによると、パラグアイの総人口が 231,194 人（うち成人男性、28,777 人）となることを紹介している。

2002 年以降、史料にもとづくパラグアイ戦争の代表的な研究であるドラティオトやウィガムの著書が刊行され [参考文献参照]、高い評価を受けるようになるにつれ、ウィガムらの提起する人口減少率がおおむね定説になりつつ

あるように見える。ただ、本稿で紹介したように、この問題は、依然として論者によりかなりの隔りがあるのも事実である。(ウィガムは、人口減少の割合が小さかったとみる研究者を「low-counters」、大きかったとみる研究者を「high-counters」と呼び、両者の間で大きな議論が起こったと記している。³⁹⁾

パラグアイ戦争における人的損害、とりわけパラグアイの人口減少の問題は、多くの研究者の注目を集めてきた。その理由は、おそらくパラグアイ戦争が敗戦国パラグアイのみならず、三国同盟軍の主力となったブラジル（そして程度の差はあれ、アルゼンチンやウルグアイ）の歴史の分水嶺となったからである。パラグアイ戦争は単なる国境紛争とは異なり、戦争において、パラグアイは通常考えられる水準を大きく超えて三国同盟軍に抵抗した。そのため、三国同盟諸国、とりわけブラジルは長期にわたり、軍事面だけでなく、国力を傾け、資源を全面的に動員する総力戦を展開せざるを得なかった。ブラジルにおいては、パラグアイ戦争を遂行する過程で、奴隷制国家と社会の近代化との間にある矛盾が露呈し、戦争の直接の影響を強く受けた軍部は戦前とは異なり、近代化を志向するようになる。奴隷制を前提とする社会において、軍の近代化（国防の強化）がいかに困難であるかが次第に意識されるようになり、そのことが政治や社会を動かす力となっていった。

パラグアイ戦争における人口損失の規模をできる限り正しく知ることは、参戦国への影響がどれほどの大きさであったかを理解する上で、必要な事柄である。参戦国にとって「総力戦」となったパラグアイ戦争は、敗戦国パラグアイの状況を一変させたのみならず、ブラジルの政治、経済、社会に大きな影響を及ぼし、ブラジルにおいて深刻な財政悪化、そして、帝政の礎であった軍部の変容を促した。これらに関する動向は、帝政の終焉・共和制成立を招来する共和革命を考える上で重要であるが、この点については、現在準備中の別稿に譲ることにする。

注

¹ 大阪大学名誉教授

² パラグアイ戦争の概要については、Fausto, 1994, pp. 208-217, 邦訳 pp. 170-179.

³ 三国同盟は、1865年5月1日、ブラジル、アルゼンチン、ウルグアイとの間で締結された秘密条約で、三国間で、事実上戦争状態にあるパラグアイとの戦争の遂行を確約した。田島, 2008, pp. 383-384.

⁴ パラグアイ戦争当時の参戦国の兵力 (Sousa Júnior, 1974, p. 301)

	ブラジル	アルゼンチン	ウルグアイ	パラグアイ
1864年11月	18,000	8,000	1,000	64,000
1866年4月	38,000	25,000	3,000	45,000
1867年7月	57,000	7,000	-----	30,000
1868年12月	25,000	5,000	1,000	18,000
1869年 -----	26,000	4,000	600	13,000→8,000
1870年 -----	3,000	-----	-----	300

1864年11月の時点で、パラグアイには、6万4,000人の兵力に加え、2万8,000人の予備役がいた。パラグアイは、「富国強兵策」のおかげで、開戦時、地域で最大の兵力を保持していた。

上記の表から分かるのは、パラグアイは開戦時には、兵力の優位性（同盟国軍2万7000に対し、パラグアイは6万4000以上）を保持していたが、それがすぐに崩れたこと、および戦局が進み、同盟軍の兵員が増強されるにつれ、同盟国軍の主力がブラジル軍（1867年7月には、同盟国軍兵力のほぼ9割）となったことである。

ここに挙げたソウザ・ジュニオルによる数字は、その後の研究者による数字と若干の齟齬があるが、兵力の大きな変遷を見るために掲載した。なおソウザ・ジュニオル自身、表の数字が各国の兵力を対比するための「概数」であるとことわっている。

⁵ Bethell, 2018, p. 93.

⁶ 田中, 1949, 下巻 p. 111. なお、同氏は、引き続き、「その為に此の国（パラグアイ）が如何程の人口を失ったかに就いては、史家の掲ぐる数字が必ずしも一致していない。

（中略）何れの説に従うも驚くべき人口減少があったことは確実である」（旧字は新字に改めた。）[下巻 p. 111-112] と述べている。

⁷ Doratioto, 2022, pp. 503-504. （南北戦争は、）「長期間継続し、社会全体の広範な資源を動員する必要があり、それゆえ『総力戦』となった。三国同盟とパラグアイとの戦争は、第二の『総力戦』であった（...）。」

⁸ Doratioto, 2022, p. 21. 「（パラグアイ戦争は、）参戦国にとって、兵士の動員や損失の面でも、領土形成の面でも、政治や財政の面でも、影響の大きな戦争であった。三国同盟とパラグアイの戦争は、（...）参戦国の社会の歴史を分割する真の分水嶺となった。」 p. 21

⁹ 三国同盟軍の死傷者は、おおむね次の通り。ブラジルは、約13万9,000人の将兵を

戦争に派遣したが、戦闘や病気、厳しい自然環境により、約5万人が死亡した。アルゼンチンは、約3万人の将兵を派遣したが、約1万8,000人が死傷した。ウルグアイは、5,500人の将兵を派遣したが、終戦時の兵力は約500人であった。Doratioto, 2022, p. 510.

¹⁰ Doratioto, 2022, p. 481.

¹¹ Whigham, 2021, p. 155. [同書に掲載の座談会での発言者は、トーマス・ウィガム (Thomas Whigham)]

¹² Thompson, 2012 (1869), p. 12; Whigham, 2021, p. 164. [同書に掲載の座談会での発言者は、マルコ・ファノ (Marco Fano)]

¹³ Whigham, *et al.*, 2002, p. 143.

¹⁴ Silvânia de Queiróz, 2011, "História e historiografia: revisando a obra 'Genocídio americano: a guerra do Paraguai' de J.J. Chiavenato", in *Anais do XXVI Simpósio Nacional de História-ANPUH • São Paulo, julho 2011*, p. 4, p. 13によると、同書は、1979年3月の発売後、数か月間ブラジルで販売された書物で最も売れた本の一つであり、2011年の時点で32版を数え、2009年までにおそらく15万部以上販売されたという。

¹⁵ Chiavenatto, 1986 (1979), pp. 149-151. なお、同書には、パラグアイ戦争がブラジルのアーリア化の試みであり、戦争では、多数のブラジル黒人が戦死したことを強調する箇所もある。

「(パラグアイ戦争は、一種のブラジルの『アーリア化』でさえあった。1850年、黒人奴隷250万人に対して、白人の自由人が550万人いた。パラグアイ戦争までその割合は大きく変わらなかった。一それゆえ、仮に、この割合であれば、ブラジルの陸軍の3分の2が白人、3分の1が黒人となるはずであった。もっとも、黒人奴隷が自分たちを抑圧する体制を守らなければならないという馬鹿げた理屈を受け入れた上のことであるが。しかし、この割合は、ヨーロッパ人の計算によると、ブラジルの陸軍は、黒人45人につき、白人が1人であった。ここから、戦死者の数の不均衡は簡単に予見できる。こうして、1870年には、ブラジル帝国は、黒人は、人口の18%にも満たなかった。白人人口が64%増加する一方で、黒人人口は60%減少した。)」

Chiavenatto, 1986 (1979), pp. 117-118.

パラグアイ戦争のブラジル人兵士に黒人が多かったのは事実であるが、統計から、「パラグアイ戦争により黒人人口が大幅に減少した」という結論を引き出すのは、サレスも述べているように、かなり強引であった。シアヴェナトが無意識にせよ「奴隷＝黒人」「自由人＝白人」と指定したところにその根本的な原因があった。つまり、実際には、自由な人口の相当部分は、黒人や混血であった。奴隷数、ないしは総人口での奴隷の割合の減少は、黒人の減少（別の言い方をすれば、「アーリア化」）を意味したわけではなく、それは「自由な黒人」の増加を意味したに過ぎなかった。Salles, 1990, pp. 77-78.

パラグアイ人のエミリオ・ウルダピリエタ (2018) もパラグアイ人口の大幅な減少を主張している。ウルダピリエタは、開戦時 (1864年) のパラグアイの人口を120万人とした上で、終戦後間もない1873年の人口を25万人とし、戦争中 (1864-1870)

に 50 万人が死亡し、戦後の混乱期の 3 年間でさらに 35 万人が死亡したと記した。そして、残りの 10 万人は同時期に国外へ移住したか、強制連行されたとみなした。人口減少率でみれば、8 割近い減少率となる。結論での記述からすると、ウルダピリエタの主張は、パラグアイは開戦前、人口 120 万を有する大きな国家であり、ブラジルとの戦争はけっして無謀な試みではなかったという点にあるように考えられる。

Urdapilleta, 2018, pp. 23-24, p. 27.

¹⁶ パラグアイ戦争は、三国同盟戦争、大戦争とも呼ばれる。大戦争 (La Guerra Guazú, La Guerra Guasú, La Guerra Grande, La Gran Guerra) という呼び名は、特にパラグアイで使用されることが多い。Guazú は、グアラニー語で「大きい」という意味。

¹⁷ Reber, 1988, p. 290.

¹⁸ Reber, 1988, p. 294.

¹⁹ Reber, 1988, p. 294.

²⁰ Reber, 1988, p. 307.

²¹ Reber, 1988, p. 307.

²² Reber, 1988, p. 307.

²³ Reber, 1988, p. 307.

²⁴ Whigham *et al.*, 1990, p. 667

²⁵ Whigham *et al.*, 1990, p. 669

²⁶ Whigham *et al.*, 1990, p. 675

²⁷ Whigham *et al.*, 1999, p. 174

²⁸ Whigham *et al.*, 1999, p. 175

²⁹ Whigham *et al.*, 1999, p. 179

³⁰ Whigham *et al.*, 1999, p. 181.

³¹ Whigham *et al.*, 1999, p. 184.

³² Reber, 2002, p. 131.

³³ Kleinpenning, 2002, p. 138.

³⁴ Kleinpenning, 2002, p. 140.

³⁵ Kleinpenning, 2002, pp. 141-142.

³⁶ Whigham *et al.*, 2002, pp.143-147.

³⁷ Whigham, 2018, p. 233.

³⁸ ウィガムは、Whigham, 2017 (p. 425) では、減少数を約 25 万人と述べている。

³⁹ Whigham, 2017, p. 580.

参考文献

Bethell, Leslie, 2018, *Brazil, Essays on history and politics*, London: Institute of Latin American Studies, School of Advanced Study, University of London.

Chiavenatto, Julio José, 1979 (19a. ed. 1986), *Genocídio americano: A Guerra do Paraguai*, São Paulo: Brasiliense.

Doratioto, Francisco Fernando Monteoliva, 2022 (2002), *Maldita guerra: Nova história da Guerra do Paraguai*, 3. ed. São Paulo: Companhia das Letras.

-
- Fausto, Boris, 1994 (3a. ed. 1999), *História do Brasil*, São Paulo: Edusp-Editora da Universidade de São Paulo.
- Klempner, Jan M. G., 2002, "Strong Reservations about 'New Insights into the Demographics of the Paraguayan War'", in *Latin American Research Review: The Latin American Studies Association*, Vol. 37, No. 3 (2002), pp. 137-142.
- Silvânia de Queiróz, 2011, "História e historiografia: revisando a obra 'Genocídio americano: a guerra do Paraguai' de J.J. Chiavenato", in *Anais do XXVI Simpósio Nacional de História-ANPUH - São Paulo, julho 2011*.
http://www.snh2011.anpuh.org/resources/anais/14/1307797502_ARQUIVO_Historia_e_historiografia_revisando_a_obra_Genocidio_americano_a_guerra_do_Paraguai_de_JJ_Chiavenato.pdf (最終アクセス 2026/02/05) ページ数は、上記に掲載の PDF ファイルのページ数。
- Reber, Vera Blinn, 1988, "The Demographics of Paraguay: A Reinterpretation of Great War, 1864-70", in *The Hispanic American Historical Review: Duke University Press*, May, vol. 68, No. 2 (May, 1988), pp. 289-319.
- Reber, Vera Blinn, 2002, "Comment on 'The Paraguayan Rosetta Stone'", in *Latin American Research Review: The Latin American Studies Association*, Vol. 37, No. 3 (2002), pp. 129-136.
- Salles, Ricardo, *Guerra do Paraguai: escravidão e cidadania na formação de exército*, Rio de Janeiro: Paz e Terra, 1990.
- Sousa Júnior, Antônio de, "Guerra do Paraguai", Holanda, Sérgio Buarque de (Org.), *História Geral da Civilização Brasileira*, 2. ed. São Paulo: Difel, 1974, t. II, vol. 4, pp. 299-314.
- Thompson, George, 2012 (1869), *War in Paraguay*, Rio de Janeiro: RCMP.
- Urdapilleta, Emilio, 2018, "Análisis de la Población Paraguaya antes de la Gran Guerra (1864-1870)" in *Desintegración del Silencio (2018)* - Academia Literaria de la Universidad del Norte - Vol. I y II.
https://www.academia.edu/43329705/AN%C3%81LISIS_DE_LA_POBLACI%C3%93N_PARAGUAYA_ANTES_DE_LA_GRAN_GUERRA_1864_1870 (最終アクセス 2026.02.05) ページ数は、上記に掲載の PDF ファイルのページ数。
- Whigham, Thomas L.; Potthast Barbara, 1990, "Some Strong Reservations: A Critique of Vera Blinn Reber's 'The Demographics of Paraguay: A Reinterpretation of Great War, 1864-70'", in *The Hispanic American Historical Review: Duke University Press*, Nov., 1990, Vol. 70, No. 40 (Nov., 1990), pp. 667-675.
- Whigham, Thomas L.; Potthast Barbara, 1999, "The Paraguayan Rosetta Stone: New Insights into the Demographics of the Paraguayan War, 1864-1870", in *Latin American Research Review: The Latin American Studies Association*, Vol. 34, No. 1 (1999), pp. 174-186.
- Whigham, Thomas L.; Potthast Barbara, 2002, "Refining the Numbers: A Response to Reber and Klempner", in *Latin American Research Review: The Latin American Studies Association*, Vol. 37, No. 3 (2002), pp. 143-148.
- Whigham, Thomas L., 2017, *The road to Armageddon: Paraguay versus the Triple Alliance, 1866-1870*, Calgary, Alberta: University of Calgary Press.
- Whigham, Thomas L., 2018 (2002), *The Paraguayan War: causes and early conduct*, 2nd.

edition, Calgary, Alberta: University of Calgary Press.
Whigham, Thomas (editor), 2021, *La Guerra Guazú, Conversaciones y Reflexiones de Historiadores Extranjeros sobre la Epopeya Paraguaya, con Introducción y Conclusión por Thomas Whigham, con la participación Liliana M. Brezzo, Dardo Ramírez Braschi, Marco Fano, Francisco Doratioto, Juan Manuel Casal*, Asunción: Intercontinental Editora..

田島久歳、2002、「パラグアイ戦争（三国同盟戦争）と戦後の状況（一八六四―七〇年）」（歴史学研究会編、『世界史史料 7 南北アメリカ 先住民の世界から 19 世紀まで』、岩波書店、pp. 383-384）。
田中耕太郎、1949、『ラテンアメリカ史概説』上・下、岩波書店。
ファウスト、ボリス、（鈴木茂訳）、2008、『ブラジル史』（世界歴史叢書）、明石書店。